
デブリガン

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デブリガン

【Nコード】

N5632T

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

手針清光、33歳。熱海エスターテという将来のJリーグ入りを目指すサッカーチームのサポーター。ただのサポーターではない。凄まじいまでの肥満体、お腹はモニョモニョ、しかく筋力はまるつきり弱い。酒が好き。もてない。童貞。今日もユニを来て、覆面をかぶり、実用自転車キコキコ漕いでエスターテの応援歌を叫びながらスタジアムへと向かうのだ。

第一章 覆面デブ

1

熱気と熱気とが、ぶつかりあう。

竜虎の激突、それはそう呼んでもさしつかえないほどに凄まじいものだった。

人生の全てをかけた超絶バトル。

地球の、いや銀河の歴史をかけて戦うスーパーイレブンたち。

誰しもが、そう思っていた。

そう、コアサポたちの、誰しもが。

しかし悲しいかな当人たちの脳味噌内の熱い世界など覗けるはずもなく、部外者からすれば「のどか」以外に言葉が浮かばない、そんなスタジアムの光景であった。

熱海市かもめ公園陸上競技場。

JR熱海駅から北西に位置する、山の中腹にあるスポーツ施設内、五年前に完成したばかりのまだ新しい競技場だ。

いまこのスタジアムで行われているのは、サッカーの試合である。

2

五月一六日 日曜日

東海社会人一部リーグ 第二節

熱海エスターテ 対 ライナマール岡崎

社会人というものの、どちらも将来のJリーグ入りを目指しているチームである。

熱海エスターテのFPユニフォームは、シャツと靴下が橙色、パンツが緑色。胸には「熱海こずゑ旅館」とスポンサー名が書かれている。

対するライナマール岡崎は、白赤の縦縞シャツに白いズボン。パウエイ用のセカンドユニフォームだ。胸には大きく「かんむり」。

日本酒の名前らしいが、まるで有名ではなく、はじめてこのロゴを見る人の大抵が注目してしまうところだ。

観客席は全体的にはガラガラだというのに、それぞれのゴール裏にはそれぞれのチームのユニフォームを着たサポーターたちが養鶏場の鶏よろしく肩寄せ合ってぎゅちりとひしめき合っている。

どちらもサポーターの人数が多くなく、客席の一角を占める程度の人数しかいないため、分散するより一箇所に集中したほうが応援に厚みやパワーが出るのだ。

最大収容人数一万八千人のスタジアムだが、観客は五百人ほどしかない。

このスタジアムをホームとする熱海エスターテのユニフォーム姿が約二百人。ライナマーレ岡崎側が百人ほど。残りはメインスタンドとバックスタンドに散らばり座っている一般人。

なお、ライナマーレ岡崎のサポーターたちは、赤と黄色の縦縞シヤツを着ている。サポーターから選手たちからも不評なこのカラーリングが、ホーム用のファーストユニフォームだ。サポーターは履いてはいないが、ファーストユニフォームのズボンには赤緑の縦縞。両チームのサポーターともお互いに、人数の少なさを太鼓の音をどんどん鳴らして誤魔化している。

「声出せ声！ 向こうのが人数少ねえのに、こっち負けてっぞ！」

熱海エスターテ側ゴール裏、プロレスラーのような覆面をかぶった大きな男が拡声器で叫んでいる。かなりブクブクと太った男だ。レプリカユニフォームにサインが書かれているが、字が何倍にも横長に広がっていて、いまにもはちきれそうだ。重そうな反面、なんだかガスが詰まって宙に浮きそうにも思える。

現在試合は前半戦。お互いに、まだ得点はない。

どちらに流れが傾くこともない、完全に均衡した状態。

サポーターとしてはお互いに絶対に負けたくない相手。それが今日のこのカードだ。

両チームとも将来のＪリーグ入りを目指しているというのに、順

調なステップアップどころかJFLから地域リーグへの降格。サポーターとしては、いろいろと複雑な感情がからみあってしまうのである。

運悪く降格してしまったとはいえ、去年までJFLに所属していたのだから、地域リーグで格下どもに勝つのは当然。従ってこのような「直接対決」を落とさないようにすることには大きな意味がある。JFLというのは、Jリーグを目指すチームにとっては、一歩手前のリーグ。地域リーグとはレベルが違うのだ。地域リーグに落ちたとはいえ、「誇りはJFL」。サポーターはみな、そう思っている。

この対戦カード、サポーターのみならず、選手たちも少なからず特別な思いがあるようだ。かなりの人数が入れ替わった熱海エスタテにも、去年の屈辱の一年を忘れていない者はいし、去年の選手がほとんど残ったライナマーレ岡崎は特に雪辱に燃え、JFL復帰を心に誓っているであろうから。

だがその気持ちがお互い悪い意味に影響してしまっていた。

この相手には絶対に負けたくない、そういう強い思いが、アグレッシブにチャレンジをしていくことではなく、反対に、ミスをしない堅実なプレーを選択してしまっているようで、近場で行なわれているサッカー観戦をただなんとなく無料で楽しみに来ていただけた一般客には、ただ倦怠感を与えているだけだった。

しかしどんな試合内容であろうと、サポーターの応援は変わらない。一勝の重み、勝ち点3の重み、敗北の悔しさは変わらない。

ドンドンドンドン ライーナマアレツ！

ドンドンドンドン ライーナマアレツ！

ドンドンドンドン あたみエスタアテッ！

ドンドンドンドン あたみエスタアテッ！

大きな太鼓の音頭に、チームを後押しする両サポーター。

だが、応援の甲斐もなく、ゲーム展開になんの変化進展も見られないまま前半戦終了の笛が鳴った。

引き上げていく選手たちに拍手が送られる。

「後半頑張れ！」

熱海エスターテ側ゴール裏、はげ頭の青年が拡声器で声援を送る。その隣にいる、覆面を被った太った男が、拡声器を素早く奪い取り、

「岡崎ぶつ殺せ！」

叫んだ。

耳に入ったか、ライナマーレ岡崎側ゴール裏から、やはり拡声器で、

「死ねっ！」

「そっちが死ねっ！ 氏ねじゃなくて死ねっ！」

すかさず覆面の男も返す。

「帰りに事故れ！」

「温泉干上げれ！」

応援そっちのけで、単なる罵詈雑言のかけあいになってしまった。そんなことをしているうちに、時間も経過し、控え室から選手たちが出てきた。

ハーフタイムも終わり、後半戦開始だ。

両チームとも、選手交代はない。

前半と全く変わらないの膠着ムード。お互い、相手の出方を見た上で、交代などのアクションを起こしたいのだろう。

ボールは行って戻ってを繰り返すだけ。刻々と時間ばかりが過ぎて行く。

残り時間、あと二十分。

得点の気配が全くない。

このままスコアレスドローで終わってしまうのか。

しかし、ついに状況に変化が訪れた。ある意味「ゴール」に次い

で、時にはそれ以上に大きい状況変化。選手の退場だ。ライナマーレ岡崎のDF永井雄太郎が、熱海エスターテのFWを引っ張り倒してこの試合二枚目の警告を受けたのだ。

ドンドンドンドンドン！

熱海エスターテサポーターの、激しい太鼓の音。

大歓声が沸く。

「どんどん行けえ！」

サポーターにいわれるまでもなかった。今年から選手が大きく入れ替わったとはいえ、熱海エスターテはもともと攻撃的であることを売りにしているチーム。相手選手の退場を機に、中央から、サイドから、DFまでが折を見てはがんがんと上がっていく、まさに怒涛の攻撃が開始された。

両サポーターの応援がいつそう熱く激しくなる。

熱海エスターテのサポーターは、自分たちの勝利がぐつと近づいたのだから当然のことだし、ライナマーレは絶対不利な状況を打破し最低でも勝ち点1、あわよくば勝ち点3を得たいのだからこれまた応援が熱くなるのは当然のこと。

熱海エスターテは、コーナーキックを得た。

ライナマーレ岡崎サポーターの密集するアウェイ側のゴール、そこに選手のほとんどが集まって、ひしめき合う。

コーナーにボールをセットした熱海エスターテのキッカー。主審の笛を待つ。

キッカーの体が一瞬だが、ちかつと光った。なにかに照らされたかのように。

「あいつら、鏡使いやがった！」

太鼓叩いている太った覆面男の隣の隣、筋肉質の大男が双眼鏡を顔から離れた。

「本当かよ、ジロさん」

太った覆面の男が確かめる。

「ああ、顔にちつこい光が当たってよ、ミネミネが眩しそうな顔し

てたぜ」

「くそう、汚え真似しやがる。ぶっ殺してやる」

「これを決めればいいんだよ。そうなれば勝ちだ。人数多いんだし」
ひよろりとした禿げ頭の眼鏡青年が、二人の大男を冷静にたしなめる。

エスタ ゴール！ エスタ ゴール！

エスタ ゴールゴールゴール！

サポーターたちが、太鼓の音に合わせて叫ぶ。ゴール近くなど、得点の匂いがありそうなセットプレーで使われるコールだ。反対側ゴール前にいる選手たちに気合を送る。

しかし「ミネミネ」の蹴ったボールは空中でラインを割り、ライナマールレ岡崎のゴールキックになってしまった。

「くそ、運のいい奴らだ。だがお前らが得点されるのも時間の問題だぜ」

太った覆面男の台詞と裏腹に、驚異的な粘りの守備を見せるライナマールレ岡崎の選手たち。引き気味になり、相手にボールを支配させながらも、肝心の一線は絶対に越えさせない。

決定機を外し続けた側にはピンチが、我慢し続けた側にはチャンスがやってくる。誰がいったか知らないが有名な台詞であるが、熱海エスターテの選手、そしてサポーターは、そんな台詞をあらためて思い知らされることになる。

「ボールに行つてたろうがよ！」

「腐れ審判！」

「うんこレベル！」

ライナマールレ岡崎の選手を、熱海エスターテのDFがスライディングタックルで転ばせてしまったのだ。主審はDFに歩み寄ると躊躇なくイエローカードをかかげ、次いでレッドカードを出した。退場である。

これでお互い十人同士、人数は対等になった。

しかし、同じ十人と十人とはいえ、心理的にどちらが有利な立場か、どちらが不利な立場か、いうまでもないだろう。

でももう時間がない。

結局、スコアレスドローか。

残念なような、ほっとしたような、でもやっぱり残念なような、いやいややっぱりほっとしちゃったりなんかしちゃったりしている、そんな熱海エスターテサポーターの複雑に揺れる気持ち。しかしそうした心境は胸の奥にしまって、サポーターは選手を、チームを鼓舞し続ける。前へ、前へ進めと。攻撃的に、とにかく前へ、攻めろ、それが熱海エスターテなのだから。

ロスタイムに入った。残り時間は二分。

サポーターの鼓舞も虚しく一方的に攻められ続ける熱海エスターテ。パスを回され続け、翻弄され続け。しかしようやく、相手の連携ミスをつき、ボールを奪うことに成功。すかさず前線のFWへとロングフィード。FWは胸でトラップし、ドリブル開始。

おそらく、これがラストワンプレーだ。

「行けえ！」

「タツちゃん！」

「上げれ！」

「クリアだクリア！」

「打っちゃえ！」

両サポーターの必死の叫びが飛び交う。

熱海エスターテのFWは、ドリブルで相手PA内に入り込んだ。仕掛けることを躊躇なく選択、細かなドリブルに切り替え相手DFを一人かわした。

そしてシュートだ。

だが運悪く、相手キーパーの胸に当たってゴールインならず。ライナマール岡崎のDFは、こぼれたボールに素早く駆け寄り、大きくクリアした。

本人もこれほどに遠くまで飛ばそうとは思っていなかったに違いない。ボールはハーフラインを越え、風にも押されてぐんぐんと伸びていく。

熱海エスターテGKの山田太郎は、あまりにも前に出すぎている。頭上を飛んでいくボール。うわっ、眩しい。後ろを振り向くと、ちょうど宙から落ちてきたボールがワンバウンドして、ゴールネットを揺らすところだった。

主審の笛が鳴った。

試合終了。

熱海エスターテ 0 ― 1 ライナマーレ岡崎

「てめえら、なんだよさっきの鏡は？」

先ほど応援席で太鼓を叩いて奇声をあげていた、覆面をかぶった太った男。熱海エスターテサポーターの、コアサポと呼ばれる応援団の中心格、その一人だ。周囲には他にも、熱海エスターテのユニフォームを着ている者が何人もいる。

スタジアムの公園側門で、ライナマーレ岡崎サポーターのリーダーに因縁をつけているところだ。

鏡の件というより、ライナマーレ岡崎に負けたことがどうにもムシクシヤしてしょうがないのだ。

「知らねえよ。言いがかりつけんじゃねえよ、バーカ。デーブ」

「ぶっ殺すぞてめえ！」

覆面男は怒鳴り声をあげた。

「やんのかよ、おー！」

岡崎サポ、ガタイは遥かに小さいが気迫で負けていない。

「気色の悪いユニフォーム着やがってよ！ 岡崎のユニフォーム趣味悪いんだよ！」

「関係ねえだろ！ 気にしてるこういうんじゃないやねえよ！ デーブ！ 温泉干上がっちゃえ！」

「うるせえバカ！ つつか温泉出なかったら熱海こずゑ旅館がスポ

ンサー撤退しちまうだろバカ野郎」

「知るかクソデブ！」

二人、どちらからともなく手を伸ばし、がっぷり四つの体勢に組み合った。

他の者たちもそれぞれ臨戦態勢をとっている。下手をすれば乱闘沙汰、一触即発の状態だ。

覆面の男は、熊のようなかなり大きな体格である。そのくせに、小柄でひよろひよろ貧弱そうな外見の相手リーダーに力負けして押されている。どうやら、単に脂肪と血気が多いというだけの男のようだ。それが客観的に恥ずかしくてなんとか必死に挽回しようとしている姿なのか、「なめぬらあ！」などわけの分からない叫び声をあげている。しかしその努力もむなしく、ふた周りも小さな相手に、ぐいぐい押されていく。

「やめてください。警察呼ぶことになりますよ！」

オレンジと緑のジャンパーを着たボランティアスタッフの老人、二人の腕を掴んで仲裁に入る。しかし二人の戦いはとまらない。

「こんなにかぶってバカじゃねえの」

ライナマールリーダーは、老人の手を払い、一瞬の隙を付いて覆面を剥ぎ取ってしまった。

「キャアーーー！」

無精髭をいっぱいたくわえた中年男の顔が現れた。

覆面を取られたショックか、引っこ抜かれたマンドラゴラのような、女のような甲高い悲鳴を上げている。

なんだか、急になよなよとした雰囲気になった。

片手で顔を隠すのはまだ理解出来るが、もう片方の手でユニフォームの胸を隠しているのは一体全体どういう心理か。

「てめえだろ、鏡使ってたの！」

先ほどジロさんと呼ばれていた筋肉質の大男と、ライナマール岡崎サポーターの一人が、不良の喧嘩のように胸を密着させて、ガンを飛ばしあっている。

「だから、やめてくださいって！」
ボランティアスタッフも大変だ。

2

「だからさあ、キヨの使い方が間違ってたって。中央のミネミネに対して、キヨを右サイドにとりあえず置いときゃオツケー、ってそれだけなんでもんよ」

先ほど覆面を剥ぎ取られてキヤーキヤー甲高い声で騒いでいた中年男は、今は堂々と素顔をさらしている。顔のイメージ通りの野太い声。さっきは、一体どこからあんな甲高い声が出ていたのだから。

男は、シシヤモにちよいとマヨネーズを付けて口に入れると、あまり噛まずにビールで流し込んだ。

「いやあ、テバさん、ぼくはねえ、ミネを中央にする監督のこだわりこそが、根本原因だと思ってます。トップ下や、DFの要の役割だからって、プロ契約の選手にこだわる必要はない」

サポーター仲間から長老さんと呼ばれている青年。頭がつるつるの完全無毛で、ヤギ髭を生やし、表情は温厚、そして声や喋り方になんとも風格がある、ということからそう呼ばれているのだが、まだ若く、二十六歳だ。実際に性格は穏やかで、まず怒らないが、いざ怒るとブチ切れ方が半端でなく、サポーター仲間の間では一番怖いのは彼だということになっている。

「まあ確かに、プロだからどうこうこだわる必要はないけど、おれはとにかくキヨがなんだか浮いちゃってんのをなんとかしたいね。新規加入で実力の底は分からないけど、もっといけると思うよあいつは」

テバさんこと手針清光三十三歳は、枝豆の皮を小皿に入れると箸を取り、今度は豚の角煮をつまんだ。取り皿には、角煮の脂身部分が山盛りになっている。他の人が食べない脂身を貰って、自分の皿にかき集めたのだ。だからというべきか、手針は肥満体である。会社の健康診断でいつもメタボといわれているが、知ったことではな

い。

「ここは「居酒屋こてきゅう」。熱海駅すぐそばにある古びたお店で、手針たち熱海エスターテのコアサポたちがなにかにつけてよく集う場所だ。この店で喜びの酒に酔い、悲しみの涙を酒で流すのだ。今日は試合に負けてしまったため、ここで反省会を行っているのである。「会」といっても名目だけ、単にサポーターが飲んで話しているだけだ。勝てば祝勝会、負ければ反省会だ。」

今日この店に集まったメンバーは手針と長老さん以外に、シゲさん四十七歳、ジロさん三十歳、畑岡君二十八歳、シュリンプ二十三歳、ダーヤマ君三十歳、飯田氏三十六歳、我孫子夫妻四十二歳と三十四歳。計十人。

「今度オフィシャルにメールでも送ってみるかな。右サイド舐めんなゴラって」

「テバちゃんよ、メールなんて効果ないぜ」

同じ大男ながら、ジロさんは運送屋の現場で働いているだけあって筋肉隆々、腹筋も割れていて、もによもによしたお腹の手針とは対極的だ。

「エスタのホームページって、もう試合の勝ち負け結果くらいしか更新しないくらいだからな。運が良ければそこに選手のコメントが載るってくらいだからな」

一昨年、JFLでの熱海エスターテの順位は五位。現在の戦力でもそこそこ戦えることを確信したフロントは、遂にJリーグ入りを目指して金にものをいwertた大補強を敢行、Jの規定を満たすようスタジアムの増築、オフィシャルホームページのコンテンツ拡充……しかし結局、補強した選手を活用させられずチームのバランスを崩してしまい、このメンバーで何故勝てないのか不思議なくらいに負けに負けを続け、勝っても入れ替え戦負ければ地域リーグに即降格という最終節、十点取られてボロ負けを喫し、地域リーグへと降格してしまったというわけである。

サポーターにとってなんと悔しいのが、自分らを地獄に突き落

とした相手がハズミSCだということ。

JFL参戦初年度はリーグ終盤まで一点も取ったことがないという生き伝説的な弱小チームだったくせに、入れ替え戦で勝利して残留してからというもの、えらく調子がいい。弱小時代に比べて一人も補強を行っていないというのにだ。そしてその年の最終戦に、そのチームによって、熱海エスターテは蹴落とされてしまったというわけだ。

地獄に落ちた熱海エスターテと反対にハズミSCはJFL第三位の好成績。Jリーグ参入を目指しているチームであったならば、その資格のある順位だ。目指してはいないので参入はしなかったが、それがまたなんとも熱海エスターテサポーターとしては腹立たしい気持ちなのである。

さて、話を戻そう。手針のメタボ体質について、いや、ジロさんがオフィシャルホームページでの意見投書の無意味さを説いたところからだったか。

「やっぱり掲示板だろ。ネットのさ、ごちゃんねる。あれ、選手も監督も絶対に見てるって。メールするより絶対に効果あるって。ムギって必ず試合前に靴紐直すじゃん。点取った試合って大抵左靴から直してんだよな、て書き込みがあつてよ、それから絶対に左から靴紐結んでるもん。もうしばらく全然点取れてないってのに、相も変わらず」

「うん。そいつは見てるなあ」

「絶対見てるってばよ」

「よし、なんか書き込むか。個人的に、あの掲示板大嫌いなんだけど、久々に行ってみるか」

手針とジロさんが掲示板になにを書くかで盛り上がっている隣で、長老さんとシゲさんの穏やかコンビが話をしている。

「しかしほんと、簡単には勝てないってことかねえ。所属カテゴリーが下がったんだから、対戦相手も弱くなってるのにな。前回は審判運もあつてなんとか勝ったけど」

「開幕前は余裕の全勝優勝を疑っていなかったのになあ。まあ考えてみりゃ、選手の大量離脱があったから実質新しいチームだし、まだ二試合目でチームも方向性探してるところうからね」

「そうそう。今日戦ったライナマーレなんか、うちと一緒にJFLから降格したくせに選手ほとんど残っているんだからな。そんな相手に対して、スタートしたばかりのチームが、今日はあとちょっとで引き分け、つてとこまでいったんだし、ある意味上々な滑り出しでしょ」

長老さんは相当以前からのサポーターで、県リーグと地域リーグを行ったり来たりしていたのをその目で見て来ているので、達観しているところがある。まあ、だから長老さんなのだ。

「でもやっぱり負けは悔しいですね。チーム状況の差がどうだろうと、サポーターとしてはライナマーレにだけは絶対に負けたくなかった。日韓みたいなものかな」

「あの鏡の事がなければなあ、違った結果になってたかも知れないのに。ミネのコーナーが直接決まっていたかも知れないのに」

「その鏡の件って本当なんですか、シゲさん」

長老さんの質問に、シゲさんの対面にいる我孫子夫妻の奥さんの方が、

「ほんとほんと。あたしも見てた。ばつちりデジカメで撮ってやつたわよ。あのライナマーレのハゲ野郎、JFLん時から忌々しい奴だと思ってたのよ、なんとなく」

JFLや地域リーグのサポーターは人数が少ないため、リーダーや、ちよつと特徴のある者などとはとにかく目立つのだ。

我孫子夫妻の奥さん、バッグからデジタルカメラを取り出して起動させると、液晶画面に問題のシーンを映し出した。

完全に画像が潰れてしまっている。

「お前、三百万画素三倍ズームの中古デジカメで、陸上競技場対岸ゴール裏の何を映そうってんだい」

旦那さん呆れ顔。

「大丈夫。あたしのパソコンの編集ソフト使えば、3200%まで拡大出来んだから」

「だからそれはあ……」

説明しても無駄な気がして旦那さんは口を閉ざした。

と、突然に、アルコールが回ってきたダーヤマ君が「よよよ」と泣き出した。自棄酒をさらにぐいとあおる。

畑岡君がなぐさめるがダーヤマ君は泣きやまず、なんだか場が湿っぽい雰囲気になってしまった。

手針は豚の角煮、の脂身をひとつつまんだ。

手針清光は住宅街の中、自転車をこいでいる。帰宅途中だ。

新聞配達に使うようなごつい実用自転車だが、彼が乗っていると今にも潰れてしまいそうなほどに脆く感じる。それほどまでに手針の肉体は肥満しているのだ。

ぎい、ぎい、ときしむような音。タイヤがいつ破裂しても不思議でない。

おおおおおん、

と、物悲しいような雄叫びをあげている。

背中にはユニフォームや覆面、拡声器の入ったスポーツバッグと、丸めたゲートフラッグを入れたケースを背負っている。

酔っている。

つい先ほどまで、「こてきゆう」で飲んでいたのだ。

ビールだけだが、しかし大ジョッキで六杯は飲んだ。

サポーター仲間のダーヤマ君に影響されて自棄酒モードになってしまったのだ。

おおおおおん、

悲しい漢の叫びであった。

グギイ、と嫌な音。突然、急ブレーキをかけて自転車を停めたのだ。

「おりゃー！」

なんの脈絡もなく、背負っていたゲートフラッグを手にし、人様の家の窓ガラスをぶち割った。

やべえ、と我に返り、慌ててペダルしゃしゃか全力疾走。

後方から怒鳴り声が聞こえてきた。ガラスを割られた家の住人だろう。

違うんだ！

手針は心の中で言い訳をした。

試合に負けたエスターテが悪いのだ。

そうよ、あたしじゃないのよ！ エスタが全部悪いのよ！ と、脳内では何故かオネエ言葉で絶叫している。

体を伏せるように下を向いて、闇雲に自転車を走らせている。

猛烈な速度で後ろに流れる背景と一緒に、嫌な記憶も流れてしまえ。

心の中ではマッハー〇！

そして、自転車ごとドブに落ちた。

3

株式会社ケーワイプランニング。

JR熱海駅から徒歩十分、小さな雑居ビルの中の小さな会社である。

元はデータ入力業であつたが、現在は、情報システムの提案、構築、保守などが主な業務だ。

メインの顧客は古い旅館や土産物屋など。

創業三十年。

「うちもそろそろコンピュータとやらを導入しないとならないかなあ」そんな時代の波に巧みに乗っかり、細々とはあるが安定した業績をあげている。

ちなみに社名は、小林と山田という二人の創業者からとつたもの。現在ならばとてもそんな名前、付けられなかっただろう。頭の悪そうな女子高生にブッチャケアリエナードと看板を指さされて笑

われてしまっ。

手針清光はこの社員である。以前は派遣社員としてだったが、二年前に直接雇用してもらい、正社員として働いている。ボーナスは出るものの、全体的な収入は減った。しかし安定性のほうが大事である。まあ、会社自体がいつ不況の波に流されるかも知れないわけだが。

手針は、プログラマーだ。肥満体なので男のくせにおっぱいもでっかいが、プロのグラマーさんというわけではない。コンピュータのプログラミングをする人、ということだ。下っ端である。クライアントの業務内容にそったコンピュータプログラムを製作することが主。小さなものを一人で作ることもあるし、チームリーダーのもと長期的なプロジェクトを組んで仕事に取り組むこともある。

アセンブリ言語とフォートランを熟知している点は他の者に一置かれるところだが、肝心のJ A V A言語が得意でないので、まあ未だに下っ端なのだろう。

「おい、木根、バッチをタスクに組んどいてっていったらう！」

チームリーダーである要田のキンキンした声が響く。手針と反対にガリガリの体型、年齢は確か四十。

「いや、当てましたよ、バッチ。そしたらエラー出たんで、ちょっと中見たら、変なファイル呼び出すルーチン入ってたんで、その行コメントアウトしちゃっていいのか、そもそもなんのファイルなのか、隣に解析させていて結果待ちです。さっき、メッセンジャー送ったじゃないですか」

木根伸介、二十九歳。非常に優秀な男で、ほとんど残業をしたことがない。このような職場においては非常に珍しい。

「そうか、確かにメッセンジャー来てるな、ははは。ごめんね」

キンキンうるせえなあ。はははじゃねえやバカ。手針清光は頼杖つきながら大あくび。椅子に座って片足だけ組んでいる。組んだ足の上に、雑誌を載せて開いている。

現在の長期プロジェクトでは要田がチームリーダーだが、今日の

手針は一人で別業務。プログラムをコンバートして擬似環境に組み込んで動作チェック、というところまでは自動化されており、今はその自動作業中なので人間は暇なのだ。

「人と人との関係は大変、合間合間にエステーテ」

なんだかよく分からないことを、ほとんど口を閉じたままモゴモゴと呟いている。

鼻毛を抜いて、ふうと息をかけて飛ばした。

飛んでけタンポポの綿毛。

今の行為、どうやら脳内ではとてもメルヘンな扱いになっているようだ。

読んでいる雑誌は、「週間蹴球」だ。

サッカー全般を取り扱ったマニアックな雑誌。

今年になってさらにマニア度が増しており、Ｊ１や海外を一切排除。「男子サッカー、Ｊ２以下」のみが記事の対象だ。

廃刊寸前と噂されており、「いよいよ自暴自棄に出たのでは。最後に開き直って本来やりたかったことをやっているのでは」「いやいや、気をてらうことで差別化をはかっているだけだ」と、この雑誌の動向自体が一部サッカーマニアの楽しみにもなっているらしい。差別化をはかりながらも、やはりそれなりに需要のある分野を扱わねば雑誌として成り立たないので、必然的にＪ２と高校サッカーを取り上げる割合が多くなるが、ＪＦＬも試合結果くらいは必ず取り上げるし、特集を組む事だつてある。社会人リーグともなると、さすがにそう頻繁に特集は組めないが、たまに取り上げるだけでも凄い。

今週号が、まさにそれであつた。なんと熱海エステーテを巻頭カラーで特集しており、手針はその記事を読んでいるところだ。

喜んで二部購入したはいいが、しかし記事の内容が手針には面白くないらしく、

「……好き勝手いいやがつてよう。おれのミネミネはそんな男じゃねーよ」

また、小さな声でぶつぶついつている。

パソコンの画面に目をやると、自動で行わせていた仕事が終わっていた。

作業の性質上、十五インチ画面で足りるような仕事ばかりなのが、手針はわざわざ自腹購入した二十六インチワイドのモニターを使っている。余った画面で、いつも熱海エスターテの壁紙が見えるようにするためだ。時には選手の写真であったり、時にはチームのロゴマークであったり、自動処理で定期的に壁紙が変わるようにしている。たまに、モー娘。の画像になることがある。

なんとなく腰をちよつと横に捻った瞬間、グキ！と背中に激痛が走った。

先日、自転車に乗ったままくると回転してドブに落ちたのだ。きれいに一回転ならともかく、九十度余計に回ってしまい、対岸のコンクリートの壁に思い切り背中をぶつけてしまったのだ。

4

熱海エスターテの試合日程記載のポスターを張っている。ポスターの写真は、峰崎光孝と志賀修司のバストショット。二人とも勇ましく腕を組んでいる。

張る場所は、店舗のガラス窓、町内会掲示板、熱海駅の通路、等々。

いま作業員一行のいる場所は、駅前の広場である。

本当はホーム開幕戦前に張ることが出来ればよかったのだが、色々手違いが発生し、間に合わなかったのだ。

ポスター張りの作業員は三名。熱海エスターテ広報の夜竹直子、よたけなおこ副務の木戸俊二、きとしゅんじボランティアとしてサポーターの長老さん。

他にも、サポーターが十人ほど、チームのレプリカユニフォームを着てぞろぞろとついて来ている。ポスター張り作業の傍らで、ゴミ拾いなどの清掃作業を行なっているのである。サポーターが勝手にやっていることで、要はユニフォームを着ての地域貢献によりチ

ームの宣伝をしているというわけだ。声を張り上げて宣伝しようものなら反感抱く者も出るが、黙々とした清掃活動なら少なくとも不快に思う者はいないだろう。

「半期分とはいえ、こないだのライナマーレ戦にメインスポット当てたポスターだからなあ。やっぱりかつこつかないなあ」

もう既に何枚か張り終えているというのに、夜竹直子は腕を組んで顔をしかめながら、いまさらのようにぼやく。でもポスターを刷り直す金も時間もないので、どうしようもない。

夜竹直子は二十九歳。広報活動が主な業務。それなりに美人といえる顔つきではあるものの、体がガツチリしており、それが美人特有のトゲを良い塩梅にそぎ落として愛嬌というような雰囲気を与えている。彼女は他の会社からの出向社員だ。クラブのJ2参入後のために、広報として招かれたのだ。しかし残念ながら、J2参入どころか地域リーグへの降格。本来ならば専属広報や副務など置いておける状況ではない。単にまだ契約期間が残っているというだけの話だ。期間は今年いっぱい。JFLに再昇格したとしても広報の契約延長がされる可能性は少ないだろう。J2での広報活動のために呼ばれた立場なのだから。ましてや再昇格が叶わず地域リーグのままであるならば、それは確実だ。

働いている間にチームへの愛着も湧いて来たし、昇格を果たし、奇跡的に契約延長が出来ればいいのだが。いや、ここを離れるにしても、自分がこのスタッフとしている間に、再昇格決定の瞬間を見たい。夜竹直子はそう思っている。

副務の木戸俊二は三十歳。夜竹と反対に、ひよろひよろと軟弱そう。そして夜竹と反対に、熱海エスターテへの愛着はさして無い。地域リーグへ降格したせいで、本業がかなり暇になってしまい、今日もこうして雑用の手伝い。「どうでもいい」から「嫌い」になってきた気さえする。自分にはもっと能力があるのに、なんでこんなくだらない仕事をしていなければならないのか。なにがサッカーだ。なにがサポーターだ。単なる暇人がくだらないことに無駄に熱くな

って、人に暴力ふるったりして。なにがフリーガンだ。

「しかし、このポスター、いい出来ですよねえ。確か木戸さんが撮影した写真ですよ。プロみたいじゃないですか」

長老さんがのんびり口調で木戸を見つめる。

「そうなんだよ。写真の勉強なんかしてないから、からっきし技術なんてないけど、クラブへの愛情かなあ。うふふ」

木戸俊二、気が弱く、自己主張の出来ない男である。もちろん血液型はA型。

夜竹直子はこの笑みを浮かべながら、

「謙遜しちゃって。プロ雇うお金すらないからね、木戸君にカメラの才能があつて助かったよ」

「才能なんてとんでもない。エスタが好きなのでですよ、フッフ」
木戸は、ただでさえ雀の巣のような頭を、ガリガリと掻いた。

「ぎい、ぎい、と自転車をきしませながら一人の男がやって来た。

この男もまた、熱海エスターテのユニフォームを着ている。キングサイズなのかも知れないが、それでも今にも破けそうなくらいピチピチだ。ピチピチというか、お腹モニヨモニヨだ。それほどに、男は肥満した体型をしている。

顔には、覆面レスラーのようなマスクを付けている。

サポーターが作詞作曲した熱海エスターテの応援歌を歌っている。新聞配達に使うような、大きくて頑丈な実用自転車なのだが、乗る者があまりに巨大であるため、相対的に小さく貧弱に見えてしまう。

サーカスのクマ。シルエットだけ見ると、まさにそんな感じだ。

自転車は、なんだかうつつすらとドブの臭い。

応援サブリダーの、手針清光である。

「土曜出勤することになって、遅れちゃった」

手針は自転車を降りた。

我孫子夫妻の奥さん、手針を見ていまさらのように、

「テバちゃん、顔隠してもさ、かえって目立つんだけど。とてつ

もなく」

「目立とうがなんだろうが、とにかく顔がばれなきゃあいんだよ」
他のサポーターたちに混じってゴミ拾いをはじめる手針。地味な
地域貢献のはずが、巨体の覆面男の出現により一転してなんだか異
様な雰囲気になってしまった。

「ねえ長老さん。テバさんて、なんでユニ着ると絶対に覆面付ける
の？」

夜竹直子は常々感じていた疑問を、彼らと知り合って半年にして
初めて口に出した。

「サツカーの応援してる人」フリーガン、って思っている人が
職場にいるらしく、クライアントに暴れているとこ絶対にばれるな
よ、仕事なくなるぞって脅されているんですよ」

「ああ、テバさん、暴れるもんねえ」

夜竹直子は納得の表情。

「いやいや、それは覆面するようになってからですよ。気が強くな
っちゃって」

「ひよっとして、覆面取った直後に妙にナヨナヨしてんのって、そ
の反動？」

「そうです」

などと二人が話していると、向こうの噴水の方では、

「タダだっていってんだから、ちよっとくらい試合を観に来たって
いいだろが、クソガキが！ どうせ下らないテレビゲームやってん
だろ！」

「デブデブ！ お前の父ちゃんもデブ！ デブ」

「皮剥いで殺すぞてめえ！」

手針清光が幼稚園児くらいの男の子と本気で口喧嘩している。

夜竹直子は前髪をかきあげ、ため息をついた。

サポーター同士のいざこざならともかく、一般の、しかも地元民
にあんなことしたら入る客も入らなくなる。

「ちよっと覆面剥ぎ取ってくるわ」

そういうと、手針の方へ小走りで駆け寄っていった。

5

JR熱海駅から海沿いに南、バスで十分、徒歩三十分ほどの住宅街に、手針清光の自宅はある。

住宅街の奥に入り込んだところなので、残念ながら海などの綺麗な風景とは無縁だ。それどころか家が密集しているため、二階の北側窓からしか外が見えないくらいだ。

築四十年ほどのボロ家だ。

多分、吹けば飛ぶ。

母と妹との三人暮らし。あと数年で定年の父は単身赴任で広島に行っており、定年と同時に戻ってくる予定だ。

「おっと、あぶねえ馬鹿野郎！」

二階の自室（外見えない方の部屋）、手針は誰にともなく叫びながら素早くテレビのリモコンを手に取り、チャンネルを変えた。

危うくJリーグのニュースを見てしまったところだった。パソコンいじりに夢中になっていて、すっかりしていた。

……でも、Jリーグって、どんな世界なんだろうな。

興味はある。

もの凄く。

とっても。

しかし、クラブのホームページも、協会のホームページも、見たことがない。

意地でも見ないようにしている。

テレビのニュースだって、いまたく咄嗟にチャンネルを変えてしまう。床に落ちているリモコンに回転レシーブよろしく飛びついて、勢いあまってベッドを真つ二つに破壊したこともある。

週間蹴球を買った時も、Jリーグ関連のところはあらかじめ他人に頼んで破り捨てて貰う。

もし、Jリーグチームのホームページ作成や情報網構築の仕事な

ど来てしまったら、自分はきっと会社を辞めるだろう。安定性重視で正社員になった身だが、そんなの知ったことではない。まあそういう仕事は熱海市の小さな会社などに回ってくることは、まずないので、その点安心してよいのだが。

手針清光は、「リーグというものを知らない。

名前くらい。

……あと、ラモスくらい。

熱海エスターテサポーターになる前はそもそもサッカーにまったく興味がなかったし、サポーターになった後は意識的に情報遮断をしている。

昇格して、はじめてJという世界を知るべきなのだ。

先に華の世界を知っておいて、上から手を伸ばして引き上げてやるなんて、あまりに傲慢だ。

チームとサポーターが一心同体となつて、一緒にJ2に上がるべきなのだ。そしてJ1に上がるべきなのだ。なんとかカップとかいうのを制するべきなのだ。アジアなんちゃってリーグだかなんだかの覇者になるべきなのだ。

とか思いつつ、今もパソコンでついリーグチームのリンクをクリックしてしまうところだった。

「あぶねー！ 魔がさした！」

ドキドキする胸をおさえると、続いて自分の顔を両手でパシパシと叩く。闘魂注入闘魂注入。

そして立ち上がると、

「あ！ た！ み！ え！ す！ た！ あ！ て！」

野太い声で絶叫した。

おれは、まだまだ本当のサポーターではない。未熟者だ。熱海エスターテのために自分にかした戒律を、誘惑に負けて自ら破つてしまふところだったのだから。

しかし、Jリーグに入つて、自分とこの選手が代表に呼ばれたりして、点決めたりなんかしたら、すげえ気持ちいいだろうな。

どんくらい、気持ちよいのだろう。

射精と……どっちが気持ちよいのだろうか。

くだらないことを考えてしまう三十三歳、童貞であった。

「馬鹿野郎かおれたちは！ 射精とサッカー地域リーグとは、所属カテゴリーがまったく違うだろうがよ！」

何故か複数形にした上で、己を叱咤する手針。

危うく同一カテゴリー扱いにしてしまうところだった。そしてたきつと、熱海エスターテのために自分に射精禁止の禁欲をかしていたに違いない。それはそれで、困る。いや、でも、それで絶対にエスタが昇格するってんなら、考える。

「兄ちゃん」

半開きのドアがさらに開いて、妹の顔がのぞく。結構ブスだ。

「うるせー！ このデブが！」

アホな考え事をしていた恥ずかしさを誤魔化すように、拳握り締めて怒鳴る手針。

「お前ほど太ってない。ボロ家でいちいち叫ぶな、さっきから」

手針恵子、二十九歳。肥満。そしてブス。なのに、彼氏がいるらしい。

父の定照はただ骨太でがっちりしているだけだが、手針清光と母の清江と妹の恵子、この三人は骨を包む肉の量も半端でない。牛肉解体職人であっても、きつと解体に数時間かかることだろう。

「なんか用かよ」

「友達が来てるよ、オタクの。あ、友達全員そうか」

「うるせえな。地獄突きくらわすぞ。叫べ風、吹けよ嵐！ って、どうでもいいから、上がってもらえよ」

「はいよ」

恵子はそういうと、ドスドスと足音を立て、ぎいぎいと階段をきませながら、一階へと下りて行った。

しばらくして今度は軽やかな、しかしどこことなく病的な足音が近づいて来た。

「ごきげんよう、手針氏！」

腰まで届く長髪。額だけは剥き出して、ぼさぼさ髪はヘアバンドでとめている。黒ブチ眼鏡。ひよろつとした体格。ネズミのような出っ歯。ジーンズの中にシャツを入れていおり、左腕には意味もなクリストバンド。

ラスカルというあだ名の男で、手針と同じく三十三歳。大学時代からの友達である。知り合って十年以上にもなる仲なのに、いまだに本名を知らない。正直、興味ない。

ラスカルはアニメ漫画オタクである。

手針自身にも、以前より性質や性格としてはオタク的なものは多分にあつたが、これまでその情熱を向けられる対象物に出会ったことがなく、実際に何かにとことんのめり込むことになったのは、熱海エスターテが初めてだ。

つまり、他人にオタク的趣味を見せたことなどこれまでに一度もなかったというのに、何故か学生時代から寄つて来る人間みんながみんなオタクばかりとはこれいかに。このラスカルといい、鉄道マニアの本田武といい、家紋オタクの得江五郎といい。

「今宵は手針氏と飲もうかと思つてね」

右手に下げている、アニメキャラの顔がプリントされたベージュのトートバッグ。「ルナティックスタープロジェクト」略してルナプロの鳳恩寺舞子だ。ほうおん じまいこそしてそのトートバッグから、日本酒の一升瓶の先端が見えている。

「やったあ」

手針は喜んだ。

そうして、お互いコップに注ぎあいながら、夜通し飲むことになったわけだが、

「どうしておれの周囲はこんな終わつちまっている奴ばかりなのだろう」

酒おごつてもらいながら平気で酷いことを呟く手針。

「ん？ なんかいった？」

「いや。まあ飲めよ」

手針はラスカルのコップに酒を注いだ。

6

「セタップ！」

手針清光は、マスクを天に掲げ、そして装着した。

「とりゃああ！」

変身だ。

スパーク！

（背景、虹色に光る）

手針清光はわずか1ミリ秒で熱海エスターテの覆面サポーターへと変身するのだ。

という特殊効果映像やナレーションは彼の頭の中だけでのこと、実際は太った中年男が一人、家の玄関前で奇天烈な雄叫びをあげながらちくちくと覆面の紐をとめているだけだ。

「変身完了！ よし、今日はアウェイ、絶対に勝つぜ！」

実用自転車に乗り込む。かつこよく飛び乗りたいところだが、なにせ体が無駄に重すぎる。その動きはもたもたとして、トドやアザラシを連想させる。

なんとか自転車のサドルにまたがった。

背中には大きなバッグと、フラッグケース。

発進！

「あたゝみえすたーて！ ドドドン、オイッ！」

近所の主婦たちが、ヒソヒソと声をひそめてなにか話している。

五月二十二日 土曜日

東海社会人一部リーグ 第三節

津市水産 対 熱海エスターテ

会場 津市サッカースタジアム。

三重県津市にある収容人数二千五百人の、小さなスタジアムだ。サッカースタジアムと名がついているが、ラグビーの試合にも利用されている。座席はメインスタンドしかなく、ゴール裏へ入ることは出来ない。だから必然的に両チームのサポーターたちは、メインスタンドの両端に分かれて応援を行うことになる。

津市水産も、熱海エスターテも、ユニフォーム姿で応援している人数は、五十人ほどでほぼ対等だ。しかしその温度はあきらかに異なっている。

熱海エスターテ側はＪリーグ入りを目指すチームだけあって、熱海市近辺のサッカー好きが集まって、とにかく昇格を目指して熱心にそれは熱心に応援をしている。

それに対して津市水産のユニフォームを着ている者は、選手の家族や、津市水産の社員が多い。上からの命令で来ている者もいるだろう。来たからにはとりあえず楽しめればいい、という程度であり、勝てばそれなりに嬉しいが負けてもさして悔しくもない。

現在午後十二時半、試合開始三十分前。ピッチ上で選手がウォーミングアップを行っている中、既に観客席では応援合戦という試合が始まっていた。

合戦といっても前述したような理由で、同じベクトルを持った者同士の衝突ではなく、毛色は相当に異なっている。

そもそも津市水産を応援している人たちのほとんどは、自分のところの選手名すらろくに知らない。一人が太鼓を叩いてガラガラ声で絶叫しているだけで、あとはまばらな拍手、声援が飛ぶ程度ではない。

対して熱海エスターテのユニフォームを着ている者は、選手の名前を知っているのは当たり前、ほとんど全員が、選手の応援歌をそらで歌うことが可能なくらいだ。

熱海市かもめ公園陸上競技場での試合と違いスタジアムDJによる選手紹介のアナウンスはなく、そのかわりにメンバー表のA5ペラ紙が配られた。

さて、時計の針も回り、選手たちのアップも終わり、あとはキックオフを待つばかりだ。

センターサークルの中心に置かれているボールを、津市水産の選手が踏みつけている。

そよそよと、おだやかな風が吹いている。

手針清光は雄叫びをあげながら、太鼓をどんと鳴らしている。周囲には、長老さんも、シゲさんも、ジロさんダーヤマ君シュリンブに我孫子夫妻の姿も見える。

JFL時代は移動範囲が全国であるため、コアサポを自称する者とはいえ旅費があまりに大変なので持ち回りで遠征をしていたのだが、地域リーグ降格により移動範囲が東海地方に限定されることになったため、皮肉なことにアウェイの試合に行きやすくなったというわけである。

主審の笛が鳴った。

津市水産ボールでキックオフだ。

「こんな売れないカップ麺ばかり作っている会社に負けるわけがねえ！」

手針は野太い声で絶叫した。今日も覆面を被っている。この姿で電車に乗ったのだが、駅員に注意され、仕方なく、こちらに着いてから被り直したのだ。

売れないカップ麺かどうかはさておいて、熱海エスターテサポーターの気持ちとしては、Jを目指さないアマチュアのみ社員のみのチームに負けるわけにはいかないのだ。こちらにはプロ契約選手だっているのだし、Jを目指しているという誇りもある。プライドの問題だけでなく、他にもプロ契約選手がいてJを目指しているチームがあり、アマチュアチームに負けようものなら競争が厳しくなってしまうのだ。

津市水産のユニフォームは上が深緑、下が真紅という、どぎついコントラストだ。靴下も、左右それぞれ緑と赤。胸の文字は二段に分かれて「緑のうどん」「赤のうどん」、赤のうどんは胸の位置と

いうより腹の位置だ。自社主力製品の名前である。

手針は先ほど、緑のうどんと赤のうどんをそれぞれ四杯づつ、計八杯を食した。文字通り、相手を食うというゲン担ぎだ。熱海市内のコンビニやスーパーでは探せども探せども見つけることが出来ず、結局津市のコンビニで購入し、そこでお湯を貰ってジロさんと一緒に食べたのだ。ちなみにジロさんは、三杯づつ食べた。

「あんなクソまずいカップ麺売ってる倒産寸前の会社に負けるわけねえ！ 売り上げ貢献して倒産エックスデーがちょっぴり伸びるように協力してやったんだから、かわりに勝ち点3貰うぜ！」

手針は応援の間にそんなことばかり叫んでいる。

さて、試合は一進一退、膠着したままの状態で前半を終えた。

そして後半戦。手針とジロさんのゲン担ぎのおかげかは分からないが、後半二十分、ついに熱海エスターテが先制した。

コーナーキックで、津市水産のクリアが、熱海エスターテ選手の顔面に当たり、みつともなくのけぞってゴールに背を向けたところを、クロスバーからの跳ね返りが後頭部に直撃し、ゴールインしたのだ。

ゴールはゴール、熱海エスターテサポーターは、爆発したようにどつと沸いた。

「超スーパーミラクルプラズマグレートビューティホーゴオオオオオオオ！」

泥臭いどころかある意味みつともないだけのゴールなのだが、熱海エスターテのゴール映像は手針清光の脳内フィルターを通すと全てビューティフルゴールになるのだ。

手針につられて、サポーターたち、さらに大爆発だ。手針も個人的な雄叫びばかりしてられない。サポーターとしての応援をリードしなければ。太鼓をがんがんがんとかき鳴らす。サポーターが声を揃えて叫ぶ。

「あっ・たっ・みつ！ オイオイオイオイ！」

「あっ・たっ・みつ！ オイオイオイオイ！」

「えっすったーあーてっ！」

津市水産サッカー部は、社内のサッカー好きで構成されたチーム。地域リーグを勝ち抜くにはかなり薄い選手層だ。しかも開幕戦で主力選手が二人、怪我してしまい、今日もベンチにも入っていない。そんな状況のチームが先制を許してしまったのだから、それからはロングボール主体の攻めに徹したのはある意味当然の成り行きともいえた。これ以上失点しないようにし、あわよくば一点取って引き分けられればよし。

守りを固めてからの津市水産の攻めは非常に単調なもので、放り込んでクリアされ、放り込んでクリアされ。しかし何度もチャレンジが続いているうち、ついにそこにドラマが生まれた。

熱海エスターテのDF石垣由斗がクリアミス。痛恨のキック空振りだ。

津市水産のFW9番、それを拾って、ドリブルだ。

石垣由斗は慌て、振り返り、後を追う。

客席に点在している津市水産側の観客は、どっと沸いて、激しく声援や拍手を飛ばした。

太鼓がドンドンドンドン！ とスピーディなリズムで、ドリブルする津市水産FWを鼓舞している。

熱海エスターテGKの山田太郎は、自陣ゴールから飛び出しすぎている。

津市水産の9番は、あまり足が速くないタイプであるため、DFに追いつかれる前にいちかばちかと遠めからシュートを撃った。山田太郎は慌てて全力で駆け戻るが、ボールはむなしくも頭上を越えて行く。

落下するボール。真っ直ぐゴールへ向かっている。

だが、シュートはほんの少しだけ精度が、足りなかった。

クロスバーに当り、跳ね返った。

跳ね返ったボールは、全力で駆け戻る山田太郎の顔面に当たって、

ゴールネットに突き刺さった。

…… オウンゴールだ。

先ほどの得点シーンもみつともなかったが、その非ではないほどに情けない失点をしてしまった。

隣の心臓の音すら聞こえるのでは、というくらいにしんと静まり返っている熱海エスターテ側応援席。

対する津市水産側応援席は、サポーターもそうでない者も立ち上がって拍手喝采だ。

数秒後、熱海エスターテサポーターたちの、内部から膨れ上がる怒りが、身を覆っていた氷の空気を爆発させて吹き飛ばした。

「練習してんのかお前！」

「てめえ、それでも去年までプロか！」

山田太郎は、降格にあたってプロ契約を解約されたのである。移籍先を探したがどこも雇ってくれるところがなく、職を斡旋して貰って本年も熱海エスターテに在籍している。

彼はひざまずき、悔しがって地面をばんばんと叩いている。

「ノリヲかおめーは！」

ジロさんは怒りの形相で叫んでいる。なんのためにカップ麺六杯も食ったと思ってるんだ。

「キーパーのタロさんを責めてもしょうがないって。前目のポジション取るのはいつものこと。単純に石垣のクリアミスが原因、しいていえばこの前のタツの退場が原因、だから層の薄さが原因なんだよ」

分析好きの飯田氏が語っているが、誰も聞いていない。

熱海エスターテの登録選手数は、去年は二十九人うちプロ契約九人であった。しかし今年は、登録選手数二十三人うちプロ契約三人だ。しかも大半の選手が離脱して大幅に入れ替わっているため、選手の技術レベル平均値は相当に落ちている。個々の連携、戦術の浸透といったチーム力がついているならばまだしも、監督はまだ戦術を模索中の段階。

そうした点を考えると、このような展開、ある意味必然だったのかも知れない。

津市水産サポーターは、追い越せムードで大盛り上がりだ。
どんどんどん、とかき鳴らされる太鼓。拍手がやまない。

「うるせーっ！」

と手針は叫ぶものの、届くはずもない。

「くそつたれが。おれのミネミネが、おれのミネミネが絶対に点を取る！」

しかし手針の大好きな峰崎光孝も、相手の執拗なマークに自由にさせて貰えず、刻々と時計の針ばかりが進んでいく。

そして奇跡が、

起こらなかった。

なんにも。

あっさりと、タイムアップを告げる笛が鳴った。

熱海エスターテサポーターは、まるで示し合わせたかのように同じタイミングでがつくりとうなだれる。

反対に、津市水産の側は拍手喝采だ。

世の無常。勝ち点1ずつ分け合ったというのに、あきらかに存在する勝者と敗者。

空を見上げると、絵に描いたような雲がぼっかり、ぼっかりと漂っている。

さわやかな陽気。

とても心地よい風が吹いている。

それはもう、悲しいくらいに。

第二章 オレンジと緑のエクスタシー

1

「オレンジと緑のオ！」

手針清光はバチを持った両腕を高く振り上げた。

そしてオレンジユニフォームを着た、我らが熱海サポーターたち、手針の太鼓のリズムに合わせ、烈火のごとき大噴火を始めた。

「エクスタシー！」

「ソイヤッ！ ソイヤッ！」

「エクスタシー！」

「ソイヤッ！ ソイヤッ！」

「あっ！ たっ！ みっ！」

「オイオイオイオイ！」

「あっ！ たっ！ みっ！」

「オイオイオイオイ！」

「さっ！ いっ！ きよっ！ ウッ！ えっ！ すっ！ たっ！」

ああ！ てっ！」

「エクスタシー！」

「ソイヤッ！ ソイヤッ！」

「エクスタシー！」

「ソイヤッ！ ソイヤッ！」

「さっ！ いっ！ きよっ！ ウッ！ えっ！ すっ！ たっ！」

ああ！ てっ！」

ドンドンドンドンドンドンドンドン！

一昨年より使用されている、チームの応援コールだ。

今日はアウェイでの試合。ピッチ上では、両チームの選手たちがウォーミングアップを行っている。

サポーターたちは、続いて選手個人の応援コールに入った。

「ゲットゴール！ ゼットゴール！ かり〜や〜。 ゼットゴール

！ ゲットゴール！ かり〜や〜。 狩屋洋介！ ゲットゴール！
「みつ！ ねっ！ ざっ！ きっ！ ミネミネ〜！ みっ！ ねっ
！ ざっ！ きっ！ ミネミネ〜！ お〜お〜 おれたちのファン
タジスタ。お〜お〜 今日も見〜せ〜てえくれ〜 峰崎光孝！」
「がんばれ やっまだ たろう 失点しないでよ〜」
「マーキト 夏田マーキト るるるるーるーるーるーるー
マーキト 夏田マーキト まーきーとー製菓〜」
「奪取ダッシュ！ しが〜 奪取ダッシュ！ しが〜 ダダダッ
ダッダッダ 志・賀・修・司！」

手針の太鼓による音頭で、選手の応援コールが進行していく。
熱海エスターテのユニフォームを着て応援に来ているサポーター
は、今日は三十人ほどだ。

これもアウェイの洗礼なのか、座席はなく、全員立ち見である。
まあ、席があってもいつも立っているが。

熱海エスターテの選手は、アウェイであるがファーストユニフォ
ーム、橙色のシャツに緑のパンツだ。対戦相手は、ホームチームだ
というのに上下とも白だ。

選手たちはお互いハーフピッチの中央に集まって円陣を組み、掛
け声を飛ばし合うと、それぞれのポジションへと散らばった。

土のグラウンド、その中に引かれたセンターサークルの中心で、
相手チームのFWはボールを踏みつけてキックオフの笛を待つ。

「おおおお〜〜〜〜」

と、熱海エスターテサポーターは突き出した手のひらを、ひらひ
ら揺すっている。

主審の笛が鳴った。

「オーイー！」

サポーター、腕を天に突き上げた。

試合開始だ。

相手FW、いったん後ろにボールを戻す。

ドンドン ドンドン

手針清光は、ゆっくりしたリズムで太鼓を叩く。

この太鼓のリズム、手針はかなり勝敗にかかわる重要なものであると認識している。

選手の気持ちに与える影響は少ないと思うからだ。しかし単なる自己主張ではいけない。選手を操作しようとするものではない。選手の気持ち、チームの流れを汲み取り、それを応援するものでなければならぬ。一点のリードを守ろうとしている選手たちに、攻める攻めろやドンドコドンドコとやっても試合を無茶苦茶にしてしまうだけだ。

純白ユニフォーム姿の対戦相手は、ボールを回しながら様子を見ている。いや、そのつもりだったが、単にボールを回させられていただけであったことに、すぐ気付くことになる。

網にかかっていた！

ボールを持っていた相手のMFがそう思った時には、囲まれ、さらにパスの出どころも限定されていた。それでもパスを出すべきか、それとも強引に仕掛けるべきか、判断に迷ったほんの一瞬の隙に、熱海エスターテのMF峰崎光孝は走り寄り、ボールを奪い取っていた。

峰崎はすぐさま前線へとパスを出した。彼は基本的に球離れが良く、しかしドリブルで相手を抜くテクニクも相当なものであるため、行動の予測がし難い。峰崎はそんな選手である。小柄だが、トップ下として活躍し、他の選手からの信頼も厚い。

ドンドンドンドンドンドンドンドン！

太鼓のリズムが若干速くなる。

狩屋洋介、生麦由紀矢のツートップ、発射台から放たれたロケットのように、二人だけで相手守備を翻弄し、どんどん切り込んでいく。

「チヨウさん行けっ！」

応援席で太鼓を叩きながら、手針は叫んだ。なお、チヨウさんとは、名前の響きからくる狩屋洋介の通称だ。

その叫びに応えてというわけではないだろうが、狩屋はミドルシートを放った。相手のGKの脇を抜けるかと思われたが、GKは鋭い反応で手を出して弾いた。浮き球に反応したムギこと生麦由紀矢が倒れながらヘディングでねじ込もうとするが、残念ながらボールは横にそれて枠を外れてしまった。

「なまむぎゆきやはできる子よ。ゴール量産決めてくれ。ムギムギイ~~~~。生麦由紀矢！」

「ゲットゴール！ ゼットゴール！ かり〜や〜。 ゼットゴール！ ゼットゴール！ かり〜や〜。 狩屋洋介！ ゼットゴール！ ゴールこそならなかったが、立て続けに得点チャンスを作った二人のFWに、サポーターは応援コールを送った。

「今日は絶対に勝つぜえ！」

手針の隣で、ムキムキマツチヨのジロさん。袖を肩までまくりあげて、腕の筋肉をムキムキさせている。

熱海エスターテはボールを支配するが、相手はがつちり引いてしまつて、なかなか決定機を作り出すことが出来ない。

だが、前半二十五分、ついに熱海エスターテが先制する。峰崎光孝がFKを直接決めたのだ。逆をつかれたGKは、びっくりとも反応することが出来なかった。

「おおっしゃ、先制だ！」

「おれのミネミネ！」

ドンドンドンドンドンドンドンドン！

手針清光、太鼓の乱れ打ち。

「みつ！ ねっ！ ざっ！ きっ！ ミネミネ〜！ みっ！ ねっ！ ざっ！ きっ！ ミネミネ〜！ お〜お〜 おれたちのファンタジスタ。峰崎光孝！」

サポーターの大合唱だ。今日来ている熱海エスターテのサポーターは三十人ほどと数は少ないが、それだけに一人一人の声を出す意識は高い。

なおも守備的に行くべきか点を取り返しに行くべきか、相手側に

そんな迷いでも生じたのだろうか。チームワークがやや乱れ出した。峰崎はその隙を見逃さず、ボールをインターセプト、少しドリブルで駆け上がると、センタリングを上げる。まったくプレッシャーのかかっていない状態ということもあるが、それを差し引いても実に精度の高いボールであった。

相手GKとDFとの間を狙ったボールである。駆け上がって来ていたボランチの夏田牧人が、落下地点へと超加速、ヘディングシュートで、あっさりとゴールネットを揺らした。

熱海エスターテ、二点目だ。

ドンドンドンドン！

激しい太鼓の音。

「マーキト 夏田マーキト るるるーるーるーるーるーるー
マーキト 夏田マーキト まーきーとー製薬」

また、サポーターの大声援だ。

「誰だよマキト役に立たねえなんていつてたのは！ 誰だよ一番の穴だなんていつてたのはよ！」

個人的に夏田牧人のことが大好きなジロさん、一人でおおはしやぎだ。幸せ独り占めだ。

相手チームは、これ以上点差を広げられないよう守備的にいくことをはつきりさせたようで、熱海エスターテは追加点を奪えないまま前半終了。

しかし後半、熱海エスターテは再び爆発した。ハーフタイムの選手交代でドリブラーの野々宮健三を出したことが功を奏した。本来彼はFWの選手だが、トップ下の峰崎の近くを衛生のように走り回ったことで、マークのきつくなっていた峰崎も息を吹き返したのである。

いくなればダブルトップ下でもいう役割で二人は中盤を支配し、前線に何度も決定的なパスを供給していく。時には二人で駆け上がり、抜群のワンツーコンビネーションで相手ゴールを脅かす。

相手は、完全に混乱してしまっていた。

こうなれば得点の生まれるのは時間の問題というものであり、そして実際に得点は生まれた。

後半十分、峰崎のコーナーキックから、DFの落葉巽がヘディングで、

同二十六分、狩屋洋介のシュートがポストに当たり、跳ね返りを野々宮健三がジャンピングボレー、

同三十九分、ボランチの志賀修司がドリブルで五人を抜いてゴール。

そして、タイムアップの笛。

5 - 0での勝利。完勝だ。

ドンドンドンドン！

「熱海エスターテ！」

ドンドンドンドン！

「熱海エスターテ！」

あらためて熱海エスターテサポーターは歓喜に爆発した。

「勝ったぜー！」

「しかも5 - 0、すげえ！」

「おれのミネミネ！」

「オレンジと緑のエクスタシイ！」

「銀河最強軍団！」

ドンドンドンドン！

「熱海エスターテ！」

ドンドンドンドン！

「熱海エスターテ！」

ドンドンドンドン！

「熱海エスターテ！」

まるでお祭り騒ぎのサポーターの前に、黒いスーツを着た女性が歩いて来て、向かい合った。

熱海エスターテ広報の、夜竹直子だ。彼女はあきらかに不機嫌な顔をしている。

「あの、みなさん。応援してただけなのは有難いんですが……好意でサポーターの入場を認めて貰ってるんですよ。練習試合で、高校のグラウンドにお邪魔している立場なんですから、騒がしすぎるのは迷惑です。さっき、ハーフタイムにもいったでしょ！ テバ、話を聞け！ だいたいなに、このはしゃぎっぷり。相手高校生でしよが！」

2

「居酒屋こてきゅう」熱海駅すぐそばにある古びたお店だ。

熱海エスターテサポーターたちは、ここで勝利の宴を開いていた。地域リーグ降格により今年はチケット代は無料だし、遠征費用もあまりかからない。そのためか今年は、試合に勝ったにせよ負けたにせよ、なにかにかこつけては飲んでいる。昨日は格下の津市水産に追いつかれてのドローで「敗者気分の酒」をたっぷり飲んだばかりだというのに。

だがしかし……

勝利の宴のはずなのに、飲めば飲むほどにテンションが下がっていく。

飲む前、飲み始めてしばらくは、勝利に浮かれてみんなではしゃぎまくっていたというのに。

要は、アルコールが本心本音を引き出しているということだ。アルコールの前では自己欺瞞は出来ないということだ。

「勝ったっていつてもよう」

「高校生じゃなあ」

「しかもさあ、夜竹さん、余計なこというなよなあ」

「そうそう。昨日、大事な試合があったとかで、主力は全然出てなかったって」

「でもさ、相手が二軍とはいえ、おれたちだって昨日は津市水産とやって疲れているからな。それで一応快勝したんだし、悪くないんじゃないの」

「まあ、そうなんだけどさあ」

「しかし、リーグ戦、勝てねえよなあ」

「勝てねえなあ」

本年度の東海社会人リーグ第一部は、既に三節が行われている。

初戦の相手、いなべ製粉にこそ2 - 0で勝利したものの、第二節はJFL復帰J昇格を目指すライバルであるライナマーレ岡崎に0 - 1で負け、昨日の第三節、津市水産には1 - 1の引き分けた。

まだたかだが三試合が終わっただけとはいえ、プロ契約選手がいる、Jリーグ入りを目指すチームとしては、お世辞にも良い成績とはいえない。どんなに譲歩しても、許容戦績は二勝一分けた。大幅に選手が入れ替わったとはいえ、JFLで戦ってきた選手がたくさんおり、ここはそれより下位のリーグなのだから。

「でも、ポジティブに考えると、今日の試合、収穫もあつたな。相手が高校生とはいえ、いろいろと見えてきたもの、あるよな」

「引かれたときにミネをどうするかなんて、はっきり答え出たしね」
「ボランチの攻め上がりについてもね。うちリーグ戦で、毎試合失点しているとはいえ、そこそこ守備は安定していると思うんだ。大崩れはしていない。毎試合、やつちまったなつてのがあるのは、ほんとに集中して欲しいところだけど。とにかく、あとはやつぱり得点だと思う。守りつつ、どう二点目を取るか。攻撃サッカーが売りのチームなのに、なんか逆になつちゃっているけど」

「確かにリスク管理しつかりしつつも、もつと効果的に攻め上げれば、相手を押し込めることが出来て、失点も減るよな。いまのエスタつてさ、攻撃的に行こうとしているのは分かるんだけど、どう攻撃的に行こうとしているのかがいまい見えなくて、それでどうにも迫力がないんだよな。まだ意思疎通が発展途上なんだよ。だから津市水産なんかも引き分けてしまう」

「よし、後ろの攻撃参加のタイミングと、ミネミネのフォロー。帰ったら、ごちゃんねるに書き込むか」

「希望が出てきたな」

「まだまだ今シーズンは始まったばかり、ライナマーレを抜いて、絶対に決勝大会に行くぞ！」

手針清光は太鼓を取り出し、雄叫びを上げ、バチを叩き始めた。
JFLに戻るために。

Jに上がるために。

ドンドンドンドン！

「熱海エスターテ！」

ドンドンドンドン！

「熱海エスターテ！」

手針の太鼓に合わせ、みな両腕を突き上げ、大声で叫ぶ。

「最強エスターテ！」

「オレンジと緑のエクスタシー！」

ジロさんは、ぐいつとジョッキを干した。

「あんたたち、いくら常連だからって騒ぎすぎ！ エクスタシーじゃないよ、バカ！ 太鼓叩くのは貸し切りのときだけっていつてるでしょ、この太っちゃよ！」

オカミさんに怒鳴られて、みなしゅんと肩を縮めてしまった。

翌日、手針は二日酔いで仕事を休んだ。

3

「こんにちは、熱海エスターテというJリーグ入りを目指している素晴らしいサッカークラブがありまして、地元住民としては頑張っている彼らをぜひとも応援しようじゃありませんか、と、つきましては試合告知のポスターなどを張らせて頂きたいのですが」

「エスターテはよく知ってるけど、弱いし、降格したじゃないか。ポスター張ってもメリットないし、面倒なだけだから、今回は見送らせてよ」

弱いし、って、知らねえじゃねえか、エスターテのこと。いま調子が悪いだけだ。だから応援すんじゃねえか。バカか。店潰れるや。しかし、手針清光は大人の男の子だ。怒りをぐつとこらえ、なにかあればまたよろしくお願いします、と金物屋を出た。

熱海すらん商店街、何人かで手分けをしてお店を巡っている。

最初は町内会にかけあってみたのだが、町内会としての協力は出来ないから、それぞれのお店で個別に頼んでみてくれと突き放されてしまったのだ。

手針はめげずに隣の店に入った。

和菓子屋だ。

木製の小さなカウンターの向こうに、少年が一人ぽつんと座っている。小学生の高学年か、せいぜいが中学生になったばかりといった感じだ。もともとの顔の造りなのか、なにかあったのかは分からないが、不機嫌そうな、むくれているような様子。

「なあ坊主、店番？ えらいねえ。お父さんお母さんいる？ 熱海エスターテってサッカーチームの（ファンの）者なんだけど」

少年は立ち上がったと思うと、手針のほうにさっと駆け寄ってきた。と思う間もなく、手針は脛を蹴飛ばされていた。

「いてっつ！」

悲鳴を上げる手針の、今度は反対の足に蹴りが炸裂。回り込んで、膝の裏からの蹴りだったので、手針は膝がつくんの原理でバランスを崩して尻餅をついて後ろに倒れてしまった。

「なにすんだ、てめえコラ！」

野太いガラガラ声で凄むも虚しく、全身蹴られまくっている。

手針は倒れながらも腕を背中に回し、背負っているリュックを開けようとする。おそらく覆面を取り出そうとしていると思われる。

「変身さえ出来れば、一瞬で宇宙の果てまでぶつとばしてやるぜ」

やはり……

しかし、伸ばした腕を蹴られ、無防備になっていた腹部を蹴られ、大事なところも蹴られ、なすすべなく、俗にいうフルボッコ。

「痛い痛い痛い痛い」

手針清光三十三歳、とうとう泣き出してしまった。

「情けないなあ」

熱海エスターテサポーター仲間であるシゲさんが店の入り口に立っていた。白い上下の服に、帽子をかぶっている。彼はこの和菓子屋の二つ隣で、ケーキ屋を営業しているのだ。

聞き覚えのあるみつともない泣き声に、駆けつけたというわけだ。
「おい雄太君、なにがあつたか知らないけど、もう勘弁してやりな
おじちゃん泣いちゃってるよ。弱いものいじめはやめなさい」

雄太と呼ばれた少年はようやく我に返ったのか、手針への攻撃をやめた。

少年、雄太は蹴り疲れたのかぜいぜいと肩で呼吸している。だんだんとその呼吸が荒く、大きくなってきたかと思うと、よろけるように膝を付き、次いで両手を付いた。四つんばいのまま、なおも喘ぎ続けている。

ヒュー、ヒュー、と呼吸がおかしい。

店の奥で階段を下りてくる足音が聞こえ、店の主人、おそらく少年の父親、が姿をあらわした。そして苦しんでいる少年に気付くと、その隣で、まだ呻きながらごろごろ転がっている手針を見て、

「あ、あんた、雄太になにをしたんだ！」

「一方的に蹴られていただけですう！」

大人の男の子は、情けない声を上げた。

ここにシゲさんがいなかったら、手針清光は今頃警察署の鉄格子を握り締めながら、最強エスターテなどと叫んでいるところだったかも知れない。

シゲさんがいてくれたことで、手針が怪しい者……ではあるものの、少なくとも少年に危害を加えていたわけではないことが証明さ

れたのだから。

あらためて手針がここに訪れた理由を話したところ、今度は主人が不機嫌そうな顔になってしまった。手針は反射的に、屈んで両脛をガードしたが、別に蹴りかかられることもなく、単に手針がアホのような格好になっただけであつた。

「うちのせがれ、いまガリツガリになつちやつて、もともと背が低いのもあつて小学生に見えますが、それでも中二なんですがね。小学生の時に、心臓のあたり、大手術しましてね。成功する確率半分もないつてくらの、そりゃあ大手術。このままじゃ死を待つばかりだったから、やるしかなかった。一応成功で、一命はとりとめたものの、心肺や筋肉がもの凄く落つこちちゃいましてね、走れない体になつちまつてるんですよ。ちょっと動くと、さっきの通り、呼吸も出来ない。……こんな身体になつちまうまで、ずっと、サッカーやってたんですよ」

そういうと、それきり主人は口をつぐんだ。

雄太は恥ずかしそうな、怒つたような、なんともいえない気持ちをその顔に浮かべて、ただ下を向いている。

シゲさんも手針も、言葉が見つからず、しばし黙っていたが、やがて、手針はおもむろに口を開いた。

「おれ、他人だから、無責任なことというよ。おれさあ、こんな太っているからかなのか、そんなだから太っているのか分からないけど、スポーツまつたくなつたことないんだよね。小学校の体育くらい。中学になると、もうサボツて授業に出なかつたよ。今後もそうだと思う。スポーツ苦手、動くの嫌い。でもさ、熱海エスターテって知ってる？ サッカーチーム。そのサポーターとして、試合に関わっているぜ。そういうのつてダメなの？ 十二人目の選手じゃダメなの？ 老若男女、なりたいたいと思えば誰でもなれるし、選手なんだから負ければクソ悔しいけど、勝てば喜びは極上だぜ」

「うるせえな、デブ！ クソデブ！ 自分でさあ、自分で走ってさあ、ボール蹴れないんじゃない意味ないだろ！ ふざけたこといってん

「じゃねえよ！」

4

「てことがあってさあ」

手針清光は背もたれのある椅子に逆向きに座り、肥満した肉体を右に左にと回転させている。椅子がぎちぎちと音を立てて、いまにも壊れそうだと。というか一度壊してしまい弁償させられたことがある。

「それは可哀想だね。でもサポーターになれなんて強制はよくないよ」

夜竹直子も手針のように椅子に反対向きに座って、ぎゅいんぎゅいんと回転させている。

「まあね。で、なんであんたがおれの座り方マネしてんの？」

「楽しいのかなあって。思わず壊しちゃうくらい。全然楽しくなかった。弁償するだけ無駄だから普通に座ったら？」

ここは熱海エスターの事務所だ。事務所というと聞こえは良いが、プレハブの、揺れれば崩れ吹けば飛ぶような建物だ。

このような建物を事務所としているには経緯がある。

以前はこの建物の隣にもっと立派な、というか普通の建物があり、その一室を山岸製作所サッカー部の部室として使用していた。Ｊリーグを目指す熱海エスターというクラブへと生まれ変わったのと同時に、その建物はクラブ専用の所有物になった。

ＪＦＬでの好成績により、念願のＪ２参入を視野に入れ、建物を取り壊して新しくすることになった。

そうして、一時避難のためにこのプレハブ事務所が建ったわけだが、結局Ｊ２参入を果たせなかったどころか地域リーグに降格してしまったため、事務所新築どころではなくなくなってしまったのだ。

手針がサポーターになってから、スタッフの手伝いをしたあとにお茶に呼ばれてこの事務所にお邪魔することは何度もあったが、地域リーグ降格により、ますます組織が少人数になって入りやすくな

った。ちよつとした提案や相談ごとがあると、気軽に立ち寄ってしまふ。

よくジロさんと二人で一緒に来ることが多いのだが、今日は手針一人だ。

ここのすぐ近くに練習場があるが、選手や監督とは、決して会わないようにしている。へらへらサイン求めたりチヨコあげたりしては、それではただのファンになってしまうから、とコアサ仲間同士で決めた約束事だ。

「みなさん、コーヒー入りましたよ」

副務の木戸俊二が、コーヒーカップの乗ったトレイを運んできた。「お、ありがとうね。じゃ、テバさんの持ってきてくれた、シゲさんのケーキいただきましょう」

夜竹直子がトレイを受け取り、カップをテーブルに並べた。

「それはいいですが、そもそもなんでボクがコーヒー入れなきゃならないんですか。こういうのって女性の仕事でしょ」

木戸俊二は雀の巢のようなもじやもじや頭を引つ掻こうとして、手を止めた。目の前の怖い姉御に、フケ落とすなと殴られるから。

「おっと、いまだきそんなこといつてるの知られたら、なんたら団体から抗議来るよ」。別に男がお茶くみしたっていいじゃん。木戸君のコーヒー美味しいよ。適材適所だよ」

「また、よく分らんことを」

適材適所ってのなら、有能なボクがこんなところでこんな仕事してるわけないでしょ。

「みんな寄つといいで」

夜竹は、ケーキの箱を開いた。

周りにいた数名のスタッフたちが、わつと集まってきた。

「あ、それ、その栗のモンブラン、オレ予約してっからね」

手針清光が、ドスのきいたガラガラ声で叫ぶ。

「みみっちいこというね、テバさん。三十過ぎた大人が」

「伊達に太ってねえよ」

手針は自分の腹を叩いた。ばんと音でもなればまだしもであったが、もによ、とめり込んだだけであった。

「じゃあね、ボクそのチヨコの、表面テカテカしてんの。あ、そうだそうだ。テバさん、さっきの話、コーヒー入れながら聞いてたけど、ボクにいい案があるよ」

「なに？」

手針の問いに木戸俊二はすぐには答えず、うふふといやらしく笑うばかりだった。

5

五月三十日 日曜日

東海社会人一部リーグ 第四節

熱海エスターテ 対 飛騨フォーコーダ

会場 熱海市かもめ公園陸上競技場。

飛騨フォーコーダは熱海エスターテやライナマーレ岡崎と同様にJリーグ参入を目指している。他のニクラブがJFLから堕ちてきたのに対し、飛騨フォーコーダは地域リーグ二部からの昇格組だ。元Jリーガーを何人も補強したことに、昇格したばかりという勢いも手伝って、開幕から無傷の三連勝。ある意味で一番やっかいな存在といえた。

熱海エスターテは、橙色のシャツに緑のパンツ。

アウェイの飛騨フォーコーダは、白いシャツに黒いパンツのセカンドユニフォーム。色は地味だが、あまりない組み合わせだ。もっと印象的なのが半袖から出ているインナーで、鎖帷子模様。忍者をイメージしているとのことだ。ちなみにホームで着るファーストユニフォームは上下ともに黒で、やはり鎖帷子インナー。とにかくユニフォームのインパクトが強いことで有名なチームだ。

ドンドンドンドン 熱海エスターテ！

ドンドンドンドン 熱海エスターテ！

今日も手針清光たちコアサポは、ゴール裏に陣取り、太鼓の音に合わせて声を張り上げている。あんな山奥の、スタジアムまでのアクセスが凄まじく悪い、隣県からの観戦であっても一泊するべきかどうか悩んでしまうようなクラブを、全国区へ上げるわけにはいかない。

手針、長老さん、シゲさん、ジロさん、我孫子夫妻、ダーヤマ君、シュリンプ、飯田氏、畑岡君（たまに彼女を連れてくるが今日は一人）、中心地帯はいつもの面々。だが今日はその中で普段見ない顔が。

商店街の和菓子屋の息子、水島雄太だ。文句いう前に一度試合を観ろ、と、手針がなかば強引に連れて来てしまったのだ。

ドンドンドンドン 熱海エスターテ！

「無駄にうるせえ！」

少年はしかめっ面で、両手で耳を塞いでいる。

「無駄じゃねえんだよ。うるさいほどいいんだよ。応援団のフリーエ〜ッ！ ってガラガラ叫ぶのと一緒に。必死さが伝わることで選手の力になるんだから」

手針清光、いうまでもないが今日も覆面姿だ。

現在、前半の三十分。まだどちらにも得点は生まれていない。

熱海エスターテは、前節は情けない失点をしてしまったが、今日はDFの落葉翼が出場停止明けで戻っており守備が安定している。

中盤もかなり支配している。何度か決定的なチャンスも作っており、得点は時間の問題と思われた。

しかし、今まで様子をうかがっていたただけだったのか、段々と飛驒フォーコーダの勢いが増してきた。

熱海エスターテは少しずつ押し込まれはじめていた。

そして、いつしか完全に飛驒フォーコーダのペースになっていた。熱海エスターテの選手がボールを奪っても、鬼のようなプレスにパ

スミスを誘われ、すぐにボールを奪われてしまう。

熱海エスターテの選手たち、そしてサポーターたちにとって、我慢の時間帯が続いた。結局、流れを取り戻すことが出来ないまま、前半四十分に失点した。ワンツーで抜け出した飛驒のFW遠藤裕也の見事なミドルシュートが決まってしまったのだ。

失点によって、攻め急ぐべきかじっくり行くべきかのチーム意識が混乱したのか、選手の動きがちぐはぐになってしまい、ますます相手のいいように攻められ続けることになった。GK山田太郎の横っ飛びファインセーブや果敢な飛び出しによるクリアなど、前節の汚名返上の活躍もあって、なんとか0-1のまま前半を終えることが出来た。

「ほら、応援なんて、意味ないじゃん。こっちのが、向こうより応援の人数ウジャウジャいるのに、いいようにボール回されて失点したじゃんか。金があつて優秀な選手を集めたほうが勝つんだよ」

水島雄太は怒っているような、悔しがっているような、複雑な表情を浮かべていた。

「バカだな。だから応援するんだろうが。だから勝つと嬉しいんだろうがよ」

手針は即答した。

「意味分かんねえ」

雄太は一瞬そっぽを向いたが、すぐピッチ上へと視線を戻した。

選手が控え室に引き上げていくところだ。

「応援することで、ピッチ上を走る十二番目の選手になれる。ある意味、選手以上に嬉しいポジションだぞ。シュート決めるのも自分、ミラクルセーブも自分、がっかりして悲しむのも自分。選手と一体になって本気になれるから、負けて悔しいから、だから勝って嬉しい」

手針は一人で語り続けている。

「おい、なんかテバちゃんかまともなこといつてるよ」

「いつも、殺せとか、うつしやミラクル、とかしかいわないくせに」

シゲさんたちがひそひそ話している。手針の地獄耳はそれを拾ったようで、

「うるせえな。おれはいつもまともなことしかいわねえよ」

ドン、と太鼓を鳴らした。

さて、ハーフタイムも終わり、後半戦が始まった。

熱海エスターテに選手交代があった。

OUT 小暮健三

IN 南原庄人

DFの選手を外し、代わりに本来MFの南原庄人を右SBとして投入した。

「おい、急造4バックかよ」

ジロさんが呟く。マツチヨな腕の筋肉が不安にぴくぴくと震えている。

だが、後半のキックオフとともに、そんな思いはすぐに払拭された。

パスが繋がる。

フォーメーションをいじったこともあるが、選手の意識変化も大きいのではないだろうか。それほどに、ボールを保持した相手への寄せが早く、激しくなっていた。

いまは熱海エスターテの流れ。我慢の時間。そう判断したのか、飛驒フォーコーダは引いて守ることを選択した。それは閉じた貝殻のように、がっちり硬かった。こじ開けること、容易ではない。その硬い貝殻を、熱海エスターテはこじ開けるのではなく、蹴り碎いてみせた。それは峰崎光孝の個人技によって。

強引なドリブル突破で三人を抜いてシュート、GKが両手で弾いたボールに自ら反応してヘディングシュート。それが、ゴールネットに突き刺さったのだ。

同点に追いついた。

熱海エスターテサポーターは一斉に雄叫びをあげた。

ドンドンドンドンドン

手針による太鼓の乱れ打ち。

「な、信じればチームは応えてくれる。これが十二番目の選手の役割なわけよ」

手針の言葉にまるで反応を見せず、水島雄太はただ無言で、ピッチに視線を向けていた。

流れを引き寄せ、同点に追いついたことにより、選手の動きはさらに活発化した。

こういう良い流れのときに点を取れないと、勝利の女神は逃げていく。とにかくチャンスを作ること。それにはとにかく上がること。選手たちからは、そのような気迫が感じられた。

熱海エスターテはもともと攻撃的なチームなのだし、選手たちが攻撃的に行こうというのなら、サポーターはそれを鼓舞するだけだ。手針は両手のバチを握り直した。

ドンドンドン トンドンドン

ドンドンドン トンドンドン

まるで民族音楽のような、不思議な太鼓のリズム。

ドンドンドン トンドンドン

熱海 オレー！

ドンドンドン トンドンドン

熱海 オレー！

手針の叩く太鼓に合わせてサポーターたちは叫ぶ。

去年から採用されている、ガンガンいこうぜのときなどに使われる応援歌だ。

それが選手たちを盛り上げたのか、熱海エスターテの凄まじい攻

撃が始まった。

基本は、単純なプレス。ただその気迫が凄まじい。飛驒フォーコーダの選手がボールを持つと数人の選手が猛烈な勢いで囲い込み、奪いに行く。プレスを恐れてその場逃れのロングボールを蹴っても、熱海エスターテDFがボールを受けるや、津波のようにざあっと全員で上がって飛驒の選手を飲み込んでしまう。

飛驒フォーコーダは、すっかり防戦一方になっていた。

敵陣で素早いパスを回す熱海エスターテの選手たち。そして志賀修司が、パスと見せかけ相手DFをフェイントでかわし、飛び出した。

「行け〜！」

応援席から、水島雄太は叫んでいた。

志賀修司は、GKと一対一になった。

GKが飛び出したが、志賀修司はその動きをみて、丁寧にゴールへと流し込んだ。

ゴールネットが揺れた。

熱海エスターテ、逆転だ。

「よっしゃ！」

雄太は両拳を天に突き上げた。

志賀修司は喜び、両腕を広げてゴール裏のサポーターたちへと駆け寄ってくる。

「奪取ダッシュ！ しが〜 奪取ダッシュ！ しが〜 志・賀・修・司！」

サポーターは、選手コールで志賀修司の結果に応える。

手針は、水島雄太の髪の毛をかき回した。

熱海エスターテの攻勢はなお続く。

飛驒フォーコーダは攻めなければならない立場になったというのに、防戦一方でまともにボールを持つことすら出来ないでいる。

波状攻撃から生まれた、熱海エスターテのCK。

キッカーは峰崎光孝。ふわり、とファーへ蹴られたボール、夏田

牧人がジャンプして頭で折り返し、志賀修司がするりとマークをかくぐり倒れ込むようにヘディングシュート。見事にゴールネットの中に吸い込まれた。

3 - 1。

熱海エスターテの追加点。志賀修司、二点目だ。

彼に走り寄り、喜び抱きつく熱海エスターテイレブン。志賀修司は、人差し指で自分の頭をちょんちょんと突付いている。「セットプレーってのは、要は頭脳の使い方」ということか。自我自賛も無理はない。身長が百六十四しかない彼が、誰がセットプレーから点を決めると思っただろう。

さらに時間は経過し、後半三十分。

熱海エスターテの仕掛けるプレスも、走り疲れてきたのか少し弱くなってきた。

しかし相変わらずリードは二点。あと十五分を耐え抜けば、そこには勝利が待っている。

ここで熱海エスターテは、交代のカードを切った。

なまむぎ ゆきや

生麦由紀矢 アウト の の みやけんぞう 野々宮健三 イン

かりや ようすけ

狩屋洋介 アウト さつ さむし 佐々仁 イン

先発FW二人を、控えFW二人と交代。

それはあまりに単純な、監督からのメッセージだった。

守備は前線から。

あわよくば、ゴールを狙え。

これで熱海エスターテは、交代枠を使い切った。

あとはとにかく攻める（＝守る）ことだけだ。

しかし、世の中も、サッカーの試合も、そう上手くはいかないものである。

監督のプランはたった二分で、がらがらと崩れることになってしまった。

理由は簡単で、ボランチの志賀修司が二分で二枚のイエローカードを貰い、退場してしまったのだ。

「ガシュー、あつという間にカレー券二枚かよ」

「二点取ったからって調子に乗ってガツガツ当たらだよ」

十人になった熱海エスターテであるが、やはり前線からの守備は捨てたくないという監督の思いからか、ボランチが夏田牧人一人になったまま、試合は続けられた。

だが、舵取り役のボランチというのは、技術だけでなく賢さも運動量も視野の広さも求められるポジション。夏田牧人は、もともと技術のあるほうではないし、残念ながら賢いプレーが出来るタイプでもない。実際のところ、チームの穴だと批判する者も多いくらいだ。なおかつ、すでに相当に疲労している。そんな状態の彼にワンボランチを任せることは、客観的に考えてかなり無理があるといえた。

「マキト、気合で行け〜！」

「この試合はお前にかかっているぞ、マキト」

必死に応援の声を張り上げるサポーターたち。

監督が決めた作戦だ、もうこうなったら夏田牧人を応援し抜くしかない。気力で頑張ってもらうしかない。

ドンドンドンドン なつ〜だまきと！

ドンドンドンドン なつ〜だまきと！

チーム応援の節で夏田牧人個人を応援し始めるサポーターたち。

おれがチームだ！ 夏田牧人はその応援にすっかりハイになってしまったのかどうかは分からないが、ドリブルで向かってくる相手MFを睨みつけ、

「来いや〜っ！」

と、片腕突き出して雄叫びをあげた。

しかし迎え撃とうにも、すでにそのMFはボールを持っていなかった。ハイになっている間に、矢は放たれていたのだ。

ロングシュート。夏田牧人の脇を唸りをあげて通り抜けたボールは、あっさりとゴールネットを揺らした。

前に出すぎていて慌てて駆け戻っていたGKの山田太郎は、間に

合わず、むなしくもゴールネットの中に飛び込んだ。

一点差に詰め寄られてしまった。

「来いやじゃねえよコラ！」

「だからマキトのワンボランチなんて無理だったんだよ、はじめから。しかも相手のほうが人数多いんだから、攻められまくるに決まってるじゃん」

「誰かボランチに下げるか、選手交代しろよ」

「もう交代枠使い切ってるっつーの」

「つーか、引けよ、全員。ドン引きでいいだろ。攻撃的チームもなにも、いまリードしてんだぞ。一人少ないんだぞ」

「監督、やつぱりあいつダメだ、使えねえ！」

「テバちゃん、太鼓、太鼓！」

ジロさんの察することを理解した手針。本当はそういう操作はしたくないのだが、仕方ない。

ドン ドドド ドン ドン ドン……

ひゅーどろどろのような、暗いリズムで太鼓を叩く。

その効果か分らないが、熱海エスターテの選手たちは自陣へと引きこもり、守備に専念するようになった。おそらくは手針の太鼓の効果というより、単に一点返されたことが原因だろうが。

しかし、それはそれで、飛驒フォーコーダのシュート練習相手になることを意味する。俗にいうサンドバッグという状態だ。

山田太郎はやたら高い位置を取りたがることで知られているGKだが、普段彼が立っている位置よりもさらにゴールに近い場所に、敵味方のほぼ全員が集まっている。不本意か否かは本人のみぞ知るだが、とにかく山田自身もゴール前べったりだ。

熱海エスターテは防戦また防戦で、息つく暇もない。弾き返してもすぐにセカンドボールを拾われる、シュートを撃たれる。

「がんばれ やつまだ たろう 失点しないでよー」

サポーターたちの熱烈な願いが天に届いたのか、山田太郎はこれ以上の失点をする事はなかった。何故なら退場してしまったから

である。ボールを持ち過ぎて遅延行為のイエローカード、それを立て続けに二回やってしまったのだ。

熱海エスターテは、もうすでに交代枠を使い切っている。控えGKを出すことが出来ない。

従って、フィールドプレイヤーの一人がGKのユニフォームを着なければならぬ。その役目は、南原庄人なんばらあつひとが担うことになった。理由は、メンバーの中で一番の長身だから。

それからの試合内容は、筆舌に尽くしがたいものだった。

シュートを撃たれるたび、熱海エスターテサポーターから悲鳴があがる。

シュートを撃たれるたび、心臓が止まりそうになる。

たまにロングボールで大きく向こう陣地へと遠ざけても、数秒後にはもうボールは戻って来ている。上がれないのだから、前に誰も選手がいけないのだから当然だ。

かつてこれほどまでに一秒が一分にも一時間にも感じられることがあっただろうか。

選手も、サポーターも、同様の気持ちであったことだろう。

そしてついに、熱海エスターテの選手もサポーターも待っていた、その瞬間が来た。

そう。神はいることを確信したその瞬間が。

雲間から届く清らかなアテネの笛。いや、グラウンドにちんまり立っている禿頭の横山三郎主審の笛の音が鳴り響いた。

試合終了。

熱海エスターテ 3 - 2 飛騨フオーコーダ

いままでの不安、苛立ち、ストレスがそのまま歓喜へと転じて、サポーターは大爆発した。

熱海エスターテは、この日ようやく、今シーズン二勝目をあげた。しかも、開幕から全勝している一番勢いのある相手に、二人の退場者を出しながらもリードを守りきったのである。

選手たちはずらずらとゴール裏までやって来ると、横一列に並

び、手を繋いだ。みんな、嬉しそうな笑顔だ。繋いだ手を高く上げ、サポーターとともに勝どきをあげた。

おっおー それゆけ熱海♪

おっおー それゆけ熱海♪

おっおー それゆけ熱海♪

おっおー それゆけ熱海♪

サポーターは歌う。

その後、あらためて勝どきをあげた。

普段ならばここで選手は引き上げるところだが、今日は様子が違っていた。

ベンチの方からスーツ姿の男性が、ピッチを斜めに突っ切って歩いて来る。雀の巢のようなちりちり爆発頭、体はゴム人形のようにひよろひよろと細長い。熱海エスターテのスタッフである木戸俊二副務だ。右手には拡声器を持っている。ゴール裏、サポーターの前まで来ると、チームキャプテンである落葉巽おちばたつみに拡声器を渡した。なにごとだろうか、とざわつくサポーター。

落葉巽は拡声器を口元に持っていった。

「元気ですかあ！」

バリバリバリバリ！ 最大音量で絶叫したため、音が割れてまったく聞き取れなかった。でもノリで、「おおー！」とサポーターたちは応えた。木戸俊二が慌てて横から手を伸ばし、マイク音量を調整する。

「あゝ、あゝ。えーと、熱海エスターテ、これで二勝目です！」

おおー！ と、またサポーターは咆える。

「やっぱりいま一番勢いがあるチームが相手だったので一筋縄では行きませんでした。今日は絶対に勝たなければならなかったので全員が死ぬ気で頑張りました。というのも、うちのスタッフから、ある話を聞いたからです。ある少年が、大病を患い、心臓の手術をして助かったのですが、すっかり体が弱くなって大好きなサッカーが出来なくなってしまったのです。今日、その少年を招くと聞いて、

それでぼくらは必死に戦いました。その少年に、勝利を捧げるために。ここに来てくれているのかは分かりませんが、この勝利を受け取ってくれたら、こんな嬉しいことはありません。別にこのチームのファンになつて欲しいとはいわない。ただ、サッカーを嫌いにならないで欲しいんです。自分を、人生を、諦めないで欲しいんです。今日の三点目、決勝点ですが、志賀のゴールは取り消します。バカな退場して迷惑かけたし。決勝点は、その少年、そしてサポーターのみなさん、十二番目の選手の得点です！」

うおおおお、とサポーターは雄叫びをあげた。

手針清光は感動の涙を流しながら、両手のばちを振るった。

ドンドンドンドン 熱海エスターテ！

ドンドンドンドン 熱海エスターテ！

「な、だからいっただろ。身体なんか動かせなくたって、サッカー出来るんだよ。ゴール出来るんだよ」

しかし手針の横に今の今までいたはずの水島雄太は、既に姿を消していた。

スタジアムにはサポーターの雄叫びがいつまでも轟いていた。

6

それ以来、水島雄太がスタジアムに姿を見せることはなかった。手針も、あれから一度も水島和菓子店には訪れていない。

しかし、シゲさんから話を聞いて、少年がどうしているのかは知っている。

一生懸命、リハビリを頑張っているとのこと。

またサッカーが出来るように。

そのためだけに。

手針もシゲさんも知らないが、このようなことがあったのだ。

飛驒フォーコーダとの試合の後、水島雄太は体の奥から溢れてくるなんともいえない奇妙な感覚に困惑し、気付くとスタジアムを飛

び出していた。しかし、そこで発作が起きてしまい、胸を押さええうずくまってしまった。

雄太は係員に介抱されて事務所へと連れていかれた。

夜竹という女性が面倒を見てくれた。

そして、夜竹という女性から聞いたのだ。小学生のときに雄太と同じ病気になり、同じ手術を受けたことのある者が、いま熱海エスターテの選手として頑張っている。峰崎光孝という、元Ｊリーガーだ。

現在の所属は、社会人リーグの選手であるが、しかし、Ｊリーガーになれたのだ。

雄太自身は、別にＪリーガーになりたいとは思わない。

それほど憧れも感じない。

しかし、とにかく努力をすれば、またサッカーが出来るようになるのだ。

とにかく努力をすれば、また走れるようになるのだ。

自分にどこまで出来るのかは分からない。

でも、希望があるのなら、行けるところまで頑張ってみよう。

自分、信じてみよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5632t/>

デブリガン

2011年8月13日03時29分発行